
鏡の中。

笹の葉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の中。

【Nコード】

N3196N

【作者名】

笹の葉

【あらすじ】

天の邪鬼な女の子東堂紀子が自分と同じ人間クローンをつくり、結局どういう結果になるか。みたいな？

東堂紀子（前書き）

やっぱり小説って難しいですね、書いててわかりません…。でも頑張ります

東堂紀子

一人が寂しいから

一人を望んだ

それは間違い？

だってあなたはそれを吹き飛ばしてくれた。「私の名前は東堂紀子です。」

両親は研究者で、兄弟はいません。好きな食べ物嫌いな食べ物には考えたことないです。ここではきちんとクローンについて研究したいと思っています。研究の話し以外で私にはあまり関わらないで下さい。邪魔ですから。」

そう言っただけで始まった私の大学生活。研究室が一気に静まりかえった気がするのには気のせいだろうか…。まあ私にとってそんなのどうだっていいが。

「えっと…はい、じゃあ今日はとりあえずこれで終わりにしようかみなさん、今日からこの８人でクローンについて研究してもらいます。明日から早速活動して下さい。解散！」

先生の声と同時に私はイスから立ち上がり、教室を出る。私が出て行った後の教室ではみんな緊張しあいながらも和気藹々と喋っている。携帯のメアド交換も…。まあ私には関係ないけれど。さつさと帰ろう。私は駅に向かって歩き出す。ここからは大体１０分程度である。

「今が３：５８分だから…、１３分の電車に乗れるかしら。」

自分の右手についている腕時計を見て確認。よし、行ける！…それにしても、私は明日からやっていけるのだろうか。もともとあまり友達とかはいないし、恋人だっていたことはない…。特に必要性を感じないから。一人が一番楽し自分さえいれば周りはどうだっていい。そういうもんじゃないのかなあ…、やっぱり人間てわからないな。等と考えているうちに家に付いた。

「ただいま。」

静かに告げる。

もちろんなんの返答もない。この広い空間に私の声が吸収されただけだ。両親はいつも通り家にはいない。一応家にも研究室はあるのだが、ちゃんとした所でやりたいらしい。私は、自分の部屋に行き、荷物をおいて寝た。

研究室

ん…。今は何時かしら。窓の向こう側を見るとさっきまでほんのり赤く染まっていた空がもう真っ黒で星が輝きだしている。いったいどれだけ寝てしまったのだろう…。はぁ…。ん？くんくん、なんか変な臭いがする…。すぐさまドアを開けてみる、どうやら研究室の方からだ。お母さん達帰ってきてるのかな？それにしてもひどすぎるぞこの臭いは。溝にヘドロがたんまりでそこに頑張つて香水とかを入れたけどかえつてますます気持ち悪いものになりました。みたいなの…。

吐き気を催しそうになりながらもなんとか鼻と口に手をあて研究室へ進む。一步一步の足取りが重い。地下へ降りる階段を使い、研究室の前まできた。う…。さらに悪臭。

「…お母さん、なんの実験をやつていらつしやるのですか。家中に変な臭いが充満していて嫌なんです…。」

私の意見に対して、中から帰ってくる声はない。しょうがない。

「お母さん、開けますよ…。」

そう言つてドアを開けた。すると、

「誰もいない…。」

拍子抜け。なんだ誰もいないのか、つてそれはいけない。早くこの臭いの元を探して何とかしなければ！とは言つてもこの研究室、家も大きいがここは更に何倍もの大きさを誇る。見つけるのは容易ではないだろう…。全くどうすればいいんだ。なにか怪しいものはあるかな。私はあたりを見渡す。

「…ん？あつた。明らかに怪しいのが…。」

こんなに早く見つけれられるとは思わなかったが、あれに間違いないだろう。あんな緑のような黒のような色でぶくぶく言つてるもの…。ゆっくりちかよりガスバーナーをとめ、鍋なのかな？それに蓋をする。ふー、これでよし。勝手にいじつていいのかと不安の念もある

があんな臭いを部屋中に充満し続けるのはいただけない。きっと大丈夫だろう。

「さて、帰ろうか。あつ！」

バシャ。机の上に置いてある資料をおとししまった。あゝもうなにやってんだか…、急いでそれを拾う。一枚二枚と拾っているうちに急に手がとまる。これは、クローンに対する研究報告書。まだまだ世間が知らないことばかり書いてある。

「これは、すごい。」

もうその言葉につきるのであった。クローンの実験は神の領域。もはや神そのものだ…。これを発表すればノーベル科学省など容易いものだろう。ああ、やはり両親は一生かかっても私の手の届かない研究者なんだな。この資料部屋でじっくりよみたい…。今は誰もいない、よね。資料を手に取り素早く部屋を出、研究室を後にした。

研究資料

パタンっ……。

静かに静かに自分の部屋のドアを閉めた。周りは先ほどと変わらず全く人の気配がない。

「……ふー。緊張した……。」

思わず安堵の息が漏れる。家に人がいないとわかっていても、やはり落ち着いてはいられなかった。研究室から持ち出してきた資料、恐る恐るもう一度ゆくりめくってみる。う、わ。やっぱり母さんはすばらしい……。一枚目からこんなに……ふむ。次、また次、とページをめくる速度が上がってくる。そして何枚かめくったとき私の目にふと止まるものがあつた。

「クローンは誰でも簡単に作れ、そしてこの世界にも既にクローンはこのやり方で生成されて私たちと同じように暮らしている。」
と、書かれていた……。

しばらくは、何の言葉もでなかった。クローンがこの世界にもう生成されている？

私たちと一緒に生活しているということか。

ただ、今までは、同じものは作れても同じ年月を重ねなければ同じ姿にはならなかったはず……。

そもそもクローンというのは、同じ遺伝子でもう一人のものを編み出すというものだ。それにいくら同じ遺伝子だって、今と同じ姿になることはない。同じ年月をかけないと……。

つまり、私は今19歳だが、現在私からクローンを作ったとする。

それはまたもや19年の月日を過ごさないと今と同じつまり私と同じ姿にはならない。なった頃には私は38歳のアラフォーでクロンは19歳という親と子のような関係になってしまふ。ということだ。

まあそんなこんなで、簡単になど作れるはずがない。

母さんは一体、どんな発明をしたんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3196n/>

鏡の中。

2010年10月9日18時03分発行